『言葉集』注釈（七）

小林　賢太・穴井　潤＊・中村　文＊＊・持田　玲＊＊＊

はじめに

本稿は、平安末期に惟宗広言が編纂した私撰集『言葉集』の注釈である。これまで巻第十五・雑下部および巻第十四・雑上部の一部に注釈を施しており、本稿は雑上部の注釈「言葉集（六）」（『京都教育大学紀要』一四四、二〇二四年三月）の続編として書かれたものである。

凡例

本稿は、冷泉家時雨亭文庫蔵『言葉和歌集　下』（冷泉家時雨亭叢書　第七巻『平安中世私撰集』所収、朝日新聞社、一九九三年）を底本とする翻刻本文を掲げ、それぞれの和歌について、【整定本文】【本文に関する注】【現代語訳】【他出】【詠出機会】【作者】【語釈】【補説】の各項を立て、適宜注を施したものである。歌番号は『新編国歌大観』第十巻所収『言葉和歌集』に従った。今回は雑上部245～253番歌を取り上げる。各歌の注釈の末尾に、それぞれの担当者を（　）内に示した。担当者は輪読時に報告を行い、四者による議論を踏まえて原稿を執筆した。注釈の内容については、各担当者が責任を負う。

翻刻本文は、改行等をも含めて、できうる限り底本の原態を残すよう努めた。虫損等で判読が困難な文字は□で示し、字体の推定が可能な場合には、□の右傍に「（○歟）」として示した。ミセケチ記号は「ヒ」に統一した。

【整定本文】詞書・和歌ともそれぞれ一行書きに改め、濁点・句読点を付し、歴史的仮名遣いに改めた。判読が困難な箇所で推定が可能な場合には、推定した文字を示した。

【本文に関する注】重書や反転を指示する記号等、翻刻では示しきれない本文上の特徴について記した。

【現代語訳】できる限り本文に忠実な通釈を試みた。言葉を補った場合には（　）内に記した。

【他出】『言葉和歌集』所収の和歌が、他の文献（南北朝期以前）に見える場合に、これを示した。和歌作品に見える場合は、特に断らない限り、『新編国歌大観』に拠る。それ以外の文献については、それぞれ典拠を示した。

【詠出機会】当該歌が歌合・歌会・定数歌等の和歌行事において詠出されたものである（含推定）場合に、伝存する歌合本文や諸歌集などの資料によって知りうる情報を示し、参考文献を掲げた。

【作者】当該和歌の作者に関して簡略に解説し、参考文献を掲げた。

【語釈】和歌の解釈に必要な語句や、特に注意すべき事項に関する解説を示した。

【補説】和歌の作意や現代語訳には示しがたい含意、また、集内における配列意識や政治社会など時代性との関連や和歌史上における意義等について記した。

なお、古典作品の引用に当たっては、韻文については特に注さない限り、『新編国歌大観』に、散文については、『日本古典文学大系』、『新日本古典文学大系』（以上、岩波書店）、『新編日本古典文学全集』（小学館）に拠る。表記等については改変する場合がある。

静蓮法師

245　コヽロヲハコノヒト枝ニナクサメテ
　　ハナヽキヤトヽチラサヽラナン

【整定本文】　静蓮法師
コヽロヲバコノヒト枝ニナグサメテハナヽキヤドヽチラサゞラナン

【本文に関する注】二句五字目、不明字の上に重書。

【現代語訳】　静蓮法師
私の心というものをこの一枝に慰めているので、（風よ）花のない宿と思って、この一枝を散らさないでほしい（私に、花を愛でる風流心がないなんて、言いふらさないでほしいものだ）。

【作者】静蓮法師。生没年未詳。『和歌色葉』上「侍従入道静蓮　俗名重義」、『勅撰作者部類』「法師俗名重茂　治部丞頼綱子」とあり、詳細は不明。『千載集』一首入集。同集実国詠の詞書に「高野にまゐりて侍りけるに、おくの院に静蓮法師が庵室にまかりたりけるに、あはれにみえ侍りければ、かへりてつかはしける」（雑中・一一三五）と名が見え、高野山奥の院に庵を構えたことが分かる。また、『続詞花集』『唯心房集』の詞書によれば、京の西山の辺りに住した時期があったらしい。各集から、実国をはじめ、清輔・教長・寂然・西行・寂蓮と交流があったことが見える。

【語釈】○コヽロヲバ　「ヲバ」は格助詞ヲに係助詞ハの濁音化。宿の主人である詠歌主体の「こころ」を強調する。「心をば」を初句に置くのは、「心をばつらき物ぞといひおきてかはらじと思ふかほぞこひしき」（拾遺集・恋五・九四八・読人不知）など、勅撰集にも用例を複数見出せる表現。**○コノヒト枝**　「ナグサメテ」と「チラサゞラナン」の両方にかかる。「この」とあるので、手元近くで鑑賞できる桜の枝である。「この一枝」には、「いたづらにかへりやせまし山ざくらこのひとえだものこらざりせば」（六条斎院歌合（天喜四年閏三月）・閏三月尋桜・右・二・式部）のように、木の一枝を指す場合と、「みや人のかざすくもゐのさくらばなこのひとえだはきみがためとて」（秋篠月清集・春・一〇四〇「おなじころ、南殿の花を折りて人のもとへつかはしける」）のように、手折った一枝を指す場合とがある。当該詠では、風に「ハナヽキヤド」として花を散らさないでほしい、と詠んでいるので、宿には花の木はなく、「コノヒト枝」は、他の場所で手折った一枝であると考える。**○ナグサメテ**　手元の一枝に咲く花に心を慰めている。当該歌は「まだちらぬはなに心をなぐさめて春過ぎぬとも思はざりけり」（赤染衛門集・四〇五「四月ついたちまでちらぬさくらのありしを、道明あざりにやりし」）と同じく、花によって心を和らげている様子を詠む。**○ハナヽキヤドヽ**　「花なき」は、「霞たちこのめもはるの雪ふれば花なきさとも花ぞちりける」（古今集・春上・九・紀貫之）の「花なき里」が著名だが、「花なき宿」も「つれづれとはなきやどに一人ゐてとなりのはるに心をぞやる」（重之集・五〇）が早く、いくつか用例が見出せる。『重之集』の歌は、「さかしくとおもはざらなんさくらばなちらばとなりの人もをしまむ」（四九「人のなれどかへしをかくとて、恵京ひとのいへの桜をみて」）の返歌で、花のない自邸に一人いて、隣家の桜に気を晴らしている。また、「さくらちるとなりにいとふはるかぜは花なきやどぞうれしかりける」（後拾遺集・春下・一三八「隣花をよめる」坂上定成）も同じく、「ハナヽキヤド」に対して隣家の花を詠む。他には、「さくらさへさかりに

なべてなりぬともはななきやどはしらずや有るらん」（赤染衛門集・五五七、定頼集（二類本）・一・初句「桜さく」）や、「ちるままにはるのすぐるをみるときははななきやどにすむべかりけり」（入道右大臣集・四「三月とをかのほどに、はなのこりなくちるをみて」）が先行例だが、いずれも「ハナヽキヤド」は、咲き散る桜花と比較して詠まれている。一方当該詠は、花のない家で一枝に心を慰めるという従来にない詠みぶりをしている。**〇チラサヾラナン**「ナン」は、他に対する希望「なむ」。花のない宿で手元のたった一枝を愛でているので、散らして無きものにしないでほしいと、風を擬人化して、風に対する願望を詠む。自然現象である風は、花の有無によって、吹く／吹かないを区別することはないが、当該詠では、風にも花を愛でる心があるとし、花のある宿では風は吹かず、散らないが、花のない宿では風を吹かせてしまうと考えているのである。また、「散る」には、世間に広まる、漏れるという意もあるため、花がない宿と周りに広めないでほしい、言いふらさないでくれ、という願望も含めた言い回しとも捉えられる。なお、「ハナヽキヤド」であるということは、心を慰める花がないため、花を愛する風雅心もないことを指していると考えられる。即ち、手折った花を散らさないでほしいという願望に加えて、私には花を愛でる心があるのだから、その心がないとは、言いふらさないでほしいという願望も込めていると解釈した。

【補説】当該詠には詞書がないため、「コノヒト枝」が、どのようなものであるかは分からない。もし、人から贈られたものであったならば、「チラサヾラナン」には、その人への思いを外に広めないでほしいという人事的な解釈も可能である。

当該詠では直接花の名前は指し示されていないが、238番歌から断続的に「手折った桜の花」が詠まれていることを踏まえ、245番歌も桜の花と解した。

（持田）

小侍従キサラキノコロアツマノ
カ□（タ歟）ヨリノホリタリトキヽテ
顕昭法師

246 イマハヨシキミマチエタリカクテコソ
ミヤコノハナヲモロトモニミメ

【整定本文】

小侍従、キサラギノコロ、アヅマノカタヨリノボリタリトキヽテ　顕昭法師
イマハヨシキミマチエタリカクテコソミヤコノハナヲモロトモニミメ

【現代語訳】

小侍従が、如月のころ、東国の方より（都へ）上ってきたと聞いて　顕昭法師
今はよし。あなたを待ち迎えることができた。このように（桜の開花とあなたのご帰京が重）なってこそ、都の花をさあ一緒に見ましょう。

【他出】『新続古今集』雑上・一六三九（詞書）

きさらぎばかりに小侍従あづまよりのぼりぬとききて、法橋顕昭もとより、いまはよし君待ちえたりかくてこそ宮この花をもろともにみめ、といひつかはしたりける返事に　小侍従
あひみんといそぎしものを君はさは花ゆゑのみや我を待ちける

【作者】顕昭→299【作者】

【語釈】**〇小侍従**　→247【作者】参照。**〇キサラギノコロ**　花が開花する月は年により異なるうえ、太陰太陽暦（旧暦）では年毎のずれが大きい。だがおおよそ、梅なら、「二月十よ日まへなりける梅のさきたりけるに」（公任集・一三）、「きさらぎまで梅の花さき侍

らざりけるとし」（新古今集・春上・三九・中務）などから推測すると二月頃の開花、桜なら、「二月の廿日比に大内の花見せよと申し侍るにいまだひらけぬ花につけてつかはしける」（頼政集・三二）、「同じ七年三月十七日、御まへの桜ををりて」（村上天皇御集・八九）などから三月頃の開花と考えてよかろう。当該歌詞書における「如月の頃」は、まもなく桜の花が咲くことを示しており、そのような時期が初句「今はよし」という感慨に繋がり、その花を共に見ようという歌意と響き合う。**○イマハヨシ**　当該歌以前の詠歌例はなく、後の使用例として、「今はよしうき世のさがとしりぬれば又こと山にやどはもとめじ」（新後撰集・雑中・一三七六・顕意上人）、「今はよし恨みもやらじ中中に人のこころのうきにつけても」（宝篋院百首・九〇）などがある。一方、散文作品では『源氏物語』若菜下にて柏木の会話文中に使用例が見出せ、女三宮の女房小侍従に対して柏木が、「今はよし。過ぎにし方をば聞こえじや」と発言している。これらの先行例はいずれも「今となってはもうよい」のような諦め、あるいは投げやりなニュアンスであり、当該歌にこれを当てはめると違和感が生じる。これ以前に顕昭と小侍従の間に何かやりとりがあり、それを踏まえて顕昭が「今はもうよいのです」と詠み贈った可能性もあるが、詞書からはそこまでは読み取れない。一方、「月夜よしよよしと人につげやらばこてふににたりまたずしもあらず」（古今集・恋四・六九二・読人不知）のような肯定的な意味での「良し」、あるいは現代語の感嘆詞「よし」のニュアンスに近いかけ声のような語と解釈すれば、「桜の開花の近い今はまさに良いとき」あるいは「今はよし！」のように喜び嘆じていることになる。ここでは肯定的な意味の「よし」で通釈した。**○キミマチエタリ**　「待ち得」は、待ち受けて会う、待ち迎える、待っていて期待通りに叶う、などの意。「優曇華の花待ち得たる心地して深山桜に目こそうつらね」（源氏物語・若紫・五二・北山の僧都）、「まちえたる春もなかばになりぬるをはなみにさそふ人もなきかな」（道済集・一一）、「見むといひし君も待ちえぬ立ばなは花のさかりもあぢきなきかな」（師光集・三〇「橘寄無常」）等のように、その対象は花や春、人など様々である。**○カクテコソ**　こうして、このような状態で。当該歌では、小侍従が都に帰ってきたことと、桜の開花時期が目前であることの二つが重なり、一緒に花見をする条件が整った状態であることを示す。**○ミヤコノハナ**　↓228**【語釈】**参照。「まづこんといそぐ事こそかたからめ都のはなのをりをすぐすな」（和泉式部続集・三五一「田舎なる人のもとより、三月十余日のほどにいひやる」）、「ちらでまてと都の花をおもはまし春かへるべき我がみなりせば」（西行法師家集・六八「那智に籠りたりけるに、花のさかりに出でける人につけて遣しける」）等のように、都の花は貴族層にとって思い入れのある景物であった。

【補説】初句、二句の二つの句切れ、また「今はよし」「かくてこそ」といった口語的表現が特徴的な歌である。「君待ち得たり」という表現も含めて考えると、当該歌はあえて大仰に、そしてやや諧謔的に、恋歌のように詠んだ一首であろう。『林下集』には、「こじじゆう大宮をうかるべきさまに申ししころ」との詞書を持つ三四〇・三四一番の次に、次のような贈答がある。

おなじ人のみののくににゆゑありてすみはべりける、のぼりたりとききて申しつかはしし

宮こをばたびのそらとやおもふらんふはのせきぢにこころとまりて　（三四二）

返し

君しのぶこころをまづはさきだてて身のみぞふはのせきはすぎこし　（三四三）

これによると小侍従は何かしらの理由で大宮多子への宮仕えを退いた後、故あって美濃国に滞在していたらしい。地方官となった近親者に同行したかとも想像されるが、詳細な理由は不明である。小侍従が上洛したと聞いて歌を贈る構図は、当該歌と共通しており、『林下集』『言葉集』の両贈答歌は同じ折のことかもしれない。東山道に含まれる美濃を、『言葉集』では「東の方」と記した可能性はあるだろう。もしそうならば、『言葉集』は、「都―東国」の対比を強調した表現を採ったと言える。「美濃」ではなく「東の方」と言い表した方が、遥か遠方のイメージを生み、四句「都の花」との対比がより鮮やかになる。一方、「美濃」を用いた『林下集』詞書は、実定詠四句「不破の関路」との呼応を意識した表現であろう。なお『言葉集』当該贈答歌からは、小侍従と顕昭が親しい間柄であったことが推察されるが、二人の交流は『小侍従集』には収められていない。『言葉集』当該歌は、小侍従の幅広い交友関係を知る上でも重要なものである。

（小林）

返　　小侍従

247　アヒミムトイソキシモノヲキミハサハ
　　ハナユヘノミヤワレヲマチケル

【整定本文】　返　　小侍従
アヒミムトイソギシモノヲキミハサハハナユヱノミヤワレヲマチケル

【現代語訳】　返し　　小侍従
（私はあなたに）会いたいと（思い、帰京を）急ぎましたのに、それではあなたは花（見）のためだけに私を待っていたのですか。

【他出】　↓246【他出】参照。

【作者】　小侍従。生没年未詳。保安二年（一一二一）頃に生まれ、建仁元年（一二〇一）頃に没したか。父は石清水八幡宮別当紀光清。母は式部大輔菅原在良女で花園左大臣有仁の女房小大進。小大進の母で小侍従の祖母に当たる三宮大進も、有仁の父輔仁親王に仕える女房であった。この母方は女房歌人の家系と言え、小侍従もまた二条天皇、大宮多子、高倉天皇に女房として出仕した。その傍ら歌人としての活動も旺盛で、太皇太后宮亮経盛朝臣家歌合、中宮亮重家朝臣家歌合、住吉社歌合、広田社歌合など多くの和歌催事に参加。晩年には『正治初度百首』、千五百番歌合などに出詠した。「待つ宵にふけゆく鐘の声きけばあかぬ別れの鳥はものかは」（新古今集・恋三・一一九一）の一首にちなんで「待宵の小侍従」とも呼ばれた。『千載集』以下の勅撰集に五十五首入集。家集は三種に大別できる。《参考文献》森本元子『私家集の研究』（明治書院、一九六六年）、井上宗雄『平安後期歌人伝の研究（増補版）』（笠間書院、一九八八年）、小林賢太『『小侍従集』の構想―雑部を中心として―』（『和歌文学研究』一一四、二〇一七年六月）、家永香織『『小侍従集』伝本考』（『和歌文学研究』一二〇、二〇二〇年六月）

【語釈】　**〇アヒミムト**　「む」は意志の助動詞。「今ははやこひしなましをあひ見むとたのめし事ぞいのちなりける」（古今集・恋二・六一三・深養父）、「あひみんとたのむればこそくれはどりあやしやいかがたちかへるべき」（金葉集・恋上・三六七「たのめてあはぬ恋の心をよめる」源顕国）のように、恋歌での使用例が目立つ。**〇イソギシモノヲ**　「急ぐ」は早く都にたどり着こうとする行動に加え、相手に会いたいと気持ちが急いていることも意味しているだろう。「ものを」は逆接の確定条件。～なのに、にもかかわらず。**〇キミハサハ**　副詞「さ」に助詞「は」がつき、「それでは・それなら」の意を表す。先行する文などに基づき、その後の判断が導かれることを示す。ここでは贈歌の内容を受けての表現。用例に「君はさは月みてのみや思ひ出づるわがおもかげははなれぬものを」（散木奇

歌集・五二八）、「きみはさはたれにならひてしりにけんわするるひとをえこそわすれね」（言葉集・一二六・二条院長門）などがある。

○ハナユヱノミヤ　「や」は疑問として解釈した。共に花を見ようと誘う顕昭に対し、私を待っていたのは花見をする相手が欲しかっただけなのですか、と切り返す。「花ゆゑ」の使用例としては、「春ならぬをりにも人のきてとはば花ゆゑのみとおもはざらまし」（為仲集・八一）、「花ゆゑにとひくるひとのわかれまでおもへばかなし春の山かぜ」（新勅撰集・春下・一一二・慈円）などがある。

【補説】初句「あひみむ」をはじめとして恋歌のような語をちりばめ、贈歌と同じく恋の雰囲気を醸成する一首となっている。顕昭の贈歌に対して切り返すような内容も、恋の贈答歌における女側の返歌のようである。当該贈答歌は、出家者とベテラン女房歌人が戯れの恋を演じながら、わざと大げさに情熱的に詠み合っているのだろう。鴨長明が『無名抄』にて「小侍従ははなやかに、目驚く所よみすうることの優れたりしなり。中にも歌の返しすること、誰にも優れたりとぞ」と評するように、当該歌も当意即妙な贈答歌を得意とした小侍従らしい詠である。（小林）

アサカレイノ□［ミ歟］スニサクラノ
ツクリハナニマリヲツケテサヽ
セ給タリケレハ
周防内侍

248　ノトカナルクモヰハヽナモチラスシテ
ハルノトマリトナリニケルカナ

【本文に関する注】詞書二行目の四字目は「ワ」のようにも見えるが、歌本文との対応関係から「ハ」と翻刻した。

【整定本文】

アサガレヒノミスニ、サクラノツクリバナニマリヲツケテ、サヽセ給タリケレバ　周防内侍

ノドカナルクモヰハヽナモチラズシテハルノトマリトナリニケルカナ

【現代語訳】

朝餉の間の御簾に、桜の造花に鞠の飾りをつけて、挿しなさっていた（お部屋の様子を見た）ので　周防内侍

穏やかな宮中は桜の花も散らないでいて、春が（過ぎていかず）留まっているところとなっていることよ。

【他出】『新勅撰和歌集』春下・一一九

堀河院御時、あさがれひのみすに、さくらのつくり枝にまりをつけてさゝせたまへりけるを見てよみ侍りける　周防内侍

のどかなる雲ゐは花もちらずしてはるのとまりとなりにけるかな

○『周防内侍集』一〇

うちの御前のおはしますあさがれひのみすに、さくらのつくりたるえだに、まりをつけてさゝげたまへりしかば

のどかなるくもゐは花もちらずしてはるのとまりとなりにけるかな

【作者】周防内侍　→222【作者】

【語釈】○アサガレヒノミス　朝餉は天皇が召し上がる食事のことで、転じて朝餉を取るための部屋の意。清涼殿西庇の二間で、御手水間・台盤所・夜御殿に囲まれているので、御簾があるのは後涼殿向かいの西面のみ。内侍の職務として陪膳のために朝餉の間に参上した際の詠か。**○サクラノツクリバナニマリヲツケテ**　「ツクリバナ」は桜の枝を模して作られた造花。桜は鞠場に立てられる式木の一つ。『革匊要略集』は、「枝鞠」という鞠を運ぶ際に木の枝に結びつけていたのが様式化した作法について「花之時ハ櫻」と記される。造花を使用することもあり、「造花ハ可為櫻」とする（渡辺融・桑

山浩然『蹴鞠の研究』東京大学出版会、一九九四年）。『栄花物語』では、源俊房が五巻の日に「桜の枝に鞠つけ」た供物を献上している。また、『明日香井和歌集』には「はるををしみをる一えだのやへざくらここのへにもとおもふばかりぞ」（一三二二「建保二年三月廿日比、やへざくらの枝に鞠をつけて内裏へまゐらせけるに、そへて侍りける」）が収められており、雅経が順徳天皇に鞠をつけた桜の枝を贈ったことが知られる。『枕草子』「遊びわざは」段には「小弓。碁。さまあしけれど鞠もをかし」と記されており、小弓・蹴鞠のいずれも春の遊戯かとする説も存する（増田繁夫校注『枕草子』和泉書院、一九八七年）。桜と鞠は春の景物として馴染み深い取り合わせであったか。**〇サヽセ給タリケレバ**　桜の造花を御簾に挿して飾っている。「後三条院かくれおはしましてのち、五月五日一品宮の御帳に昌蒲ふかせ侍りけるに、さくらのつくりばなのさされたるをみてよめる」（金葉集三奏本・雑下・五九七詞書）のように、室礼の調度を飾ることがあった（**【補説】**）。**〇ノドカナルクモヰハヽナモチラズシテ**　「ノドカ」は状況や雰囲気が静かで穏やかな様。桜とともに用いる際は「久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ」（古今集・春下・八四・友則）のように、麗らかな春日に桜が散ってしまうことを詠む。当該歌では「ツクリバナ」なので、散らない桜がのどかな天皇の居所に春が留まっていることを視覚的に示している。「クモヰハ」と強調することで「（世の中の）季節は春から夏へと移り変わっているのに」ということを暗示しており、外界と宮中を対比させ、長久の春が訪れる宮中を言祝いでいる。**〇ハルノトマリ**　「トマリ」は舟の停泊地や旅人の宿泊地のことで、詞書「マリヲツケテ」に言寄せている。前掲雅経歌に対する順徳院歌でも「はるををしみをりつる花もここのへにおもふあまりのいろはそへけり」（明日香井集・一三二三）と鞠を詠み込んでいる（大野順子『『周防内侍集』注釈（1）』『金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要』一三、二〇二一年三月）。「季節＋とまり」は「年ごとにもみぢばながす竜田河みなとや秋のとまりなるらむ」（古今集・秋下・三一一・貫之）が早い例で、その季節がたどり着くところとして詠まれる。当該歌も「春が行き過ぎず留まるところ」といった意で用いられている。**〇ナリニケルカナ**　属目の景に対して、現在の情景になったことに感慨を催す定型表現。

【補説】造花の枝が朝餉間に飾られていた折の歌。「ツクリバナ」は散らないので、春が留まると詠むことによって麗らかな宮中の長久性を示し、そこに君臨する天皇を讃美している。「とまり―鞠」という物名的な機知も窺われる。朝餉間の御簾に花を挿すという当該歌に近い状況としては、**【語釈】**「サヽセ給…」項の例の他に、「…院のつぼねに、…（略）…もやのみすにあふひのかれてかかりたる…」（周防内侍集・三九詞書）や「御着帯の後祭日あさがれひの御きちやうにあふひのかかりたりける…」（新千載集・夏・二〇三詞書）などがあり、几帳や御簾に花を飾ることがあったようだ。天皇の居所の設えに即座に反応し、散らない桜の作り花と鞠の取り合わせで飾られたこの場所こそ「春の行き着くところ」となっているのだと詠んでみせた、当意即妙な一首といえる。なお、周防内侍は四代に仕えたため、どの天皇の御代であったか判断するのは困難である。大野順子が述べるように「堀河院御時」とする『新勅撰集』詞書は留保する必要があろう（大野前掲論文同）。（穴井）

帰雁哥トテ　西行法師

249　タマツ□[サ歟]ノハシカ□[キ歟]〔　〕□[ミ歟]ユルカナ
　　トシ□[ヲ歟]クレツヽカヘルカリカネ

【本文に関する注】歌本文初二句に擦り跡、二句に空所あるか。

【整定本文】　帰雁哥トテ　　西行法師
タマヅサノハシガキ〔　　〕ミユルカナトシオクレツヽカヘルカリガネ

【現代語訳】　「帰雁」の歌として　　西行法師
まるで玉梓の端書〔　　〕見えるものだ。（本来の）時期に遅れて帰って行く雁よ。

【他出】『山家集』四八「帰雁」
たまづさのはしがきかとも見ゆるかなとびおくれつつかへるかりがね
○『西行上人集』二八「帰雁を長楽寺にて」
玉づさのはしがきかとも見ゆるかなとびおくれつつ帰るかりがね
○『山家心中集』一七四「かへるかりの哥よみ侍しに」
たまつさのはしかきかともみゆるかなとひをくれつゝかへるかりかね
○『夫木和歌抄』一六三〇「家集、帰雁を」西行上人
玉章のはしがきかとも見ゆるかな飛びおくれつつかへる雁がね

【作者】西行。俗名佐藤義清（音通による別字多数）。生没年は元永元年（一一一八）～文治六年（一一九〇）二月一六日、七三歳。法名円位、大本坊・西行房とも号した。父は佐藤康清（藤成流）、母は監物源清経女。同母弟に仲清がいる。妻帯して娘があったといわれ、息子に隆聖・慶縁。在俗時は鳥羽院下北面の武士で、徳大寺実能の家人であった。二三歳で出家するも、その原因は不明。陸奥・讃岐への旅など諸国を巡り、高野山や伊勢に在住していた時期があったことが知られるが、その年代にも不明な点が多い。『二見浦百首』の勧進や、自歌合の嚆矢である『御裳濯河歌合』『宮河歌合』を撰し、藤原俊成・定家親子に加判を依頼して伊勢の両宮に奉納するなど、独自の和歌活動を行う。『山家集』『山家心中集』『聞書集』『残集』（以上、自撰）、『西行上人集』（他撰）など多数の私家集が残る。『詞花集』に読み人しらずとして一首入集、以後勅撰集に多数の歌が採られる。『新古今集』では入集数一位。《参考文献》久保田淳『新古今歌人の研究』（東京大学出版会、一九七三年）、目崎徳衛『西行の思想史的研究』（吉川弘文館、一九七八年）、宇津木言行「西行年譜考証稿」（『西行学』九　笠間書院、二〇一八年一〇月）

【語釈】○帰雁哥トテ　「帰雁」は秋に日本に飛来した後、春になって北方へ帰る雁のこと。『古今集』に「帰雁をよめる」という詞書で「はるがすみたつを見すてゆくかりは花なきさとにすみやならへる」（春上・三一・伊勢）と詠まれるのが早い例。『西行上人集』詞書は「長楽寺にて」と記されており、歌会で詠まれた題詠歌と思しい（**【補説】**）。**○タマヅサノ**　「タマヅサ」は便りを運ぶ使者の持つ梓の杖、転じて手紙や便りの意。「秋風にはつかりがねぞきこゆなるたがたまづさをかけてきつらむ」（古今集・秋上・二〇七・友則）のように雁信の故事を踏まえて詠まれる。友則歌のような「玉梓を運ぶ雁」という詠み方とは別に、「雁飛碧落書青紙　隼撃霜林破錦機」（和漢朗詠集・三二一「雁付帰雁」道真）などの影響で、飛ぶ雁の姿を紙に書かれた文字（＝手紙）に見立てた「薄墨にかくたまづさとみゆるかなかすめる空にかへるかりがね」（後拾遺集・春上・七一・国基）のような詠み方も現れた。当該歌は後者の詠み方を前提として、規則的に連なる文字（＝連なって飛ぶ雁）から離れた追伸（＝飛び遅れている雁）のようだと見立てる趣向である。**○ハシガキ**〔　　〕「ハシガキ」は手紙などの初頭や末尾に書き添えること、また、その言葉の意。二句は空所があるか。他出本文では「はしがきかとも」となっており、「端書なのかと」といった意味になると考えられる。**○ミユルカナ**　「をみなへしうしろめたくも見ゆるかなあれたるやどにひとりたてれば」（古今集・秋上・二三七・兼覧王）のように、三句に置いて、詠作者の主観（A）と客観的な

景（B）を対比させる定型表現。多くは「A―見ゆるかな―B」のかたちで詠まれる。**○トシオクレツヽ**　他出本文はいずれも「とびおくれつつ」とする。連なって飛ぶ中の遅れた雁を「タマヅサ」に見立てたところが眼目であるため、他出本文でなければ作意が見えにくい。「トシ」は季節の区分と解し、本来の時期（＝春）より遅れて帰る雁と解した。**○カヘルカリガネ**　帰雁を詠む際に結句に置くのは定型表現となっている。「タマヅサ」とともに詠む例は同時代にも散見されるが、「たまづさのまだひもとかぬ心地してかすみのうちにかへるかりがね」（貧道集・一五五「帰雁をよめる」）、「たえだえにかくたまづさとみゆるかなくものたえまにかへるかりがね」（風情集・三八一「帰雁」）、「おなじうへにかきかさねたるたまづさははねうちかはしかへるかりがね」（季経集・三「帰雁を」）のように雁と玉梓の結びつけ方が多様化している。同じ発想を用いながらどのように意匠を凝らすかが、この時代に「帰雁」題を詠む際の要諦であったのだろう。

【補説】虫損、空所、独自異文によって歌意が取りにくい。『言葉集』本文を尊重して「トシ」を季節の変化と解釈したが、やや無理があるか。雁を玉梓に見立てる詠み方を前提として、群れから遅れた雁を玉梓に記された端書に擬える趣向を加えたのが、本来の当該歌の作意と見てよいだろう。長楽寺は京都東山の寺院で、創建当初は延暦寺の末寺であったが、平安末期には観音信仰を中心に阿弥陀仏信仰が行われる場であった。『能因法師集』『本朝無題詩』などには長楽寺で詠まれた和歌漢詩が残っている。十世紀後半から院政期にかけて詩歌会が催される場として機能しており、風趣を求める人々が逍遥する地の一つであった（川村晃生『摂関期和歌史の研究』第二章第二節五、三弥井書店、一九九一年）。「夜もすがらをしげなくふくあらしかなわざとしぐれのそむるこずゑを」（山家集・四九一「長楽寺にて、よるもみぢを思ふと云ふ事を人人よみけるに」）のように西行も歌会に参加していたようであり、当該歌も長楽寺で催行された歌会での詠であったか（宇津木言行校注『山家集』角川ソフィア文庫、二〇一八年）。（穴井）

□（山歟）家ノヨフコトリヲ
桜井大僧正
250　カリニキテマタスミツカヌ山里ニ
ナレ〳〵シクモヨフコトリ□（カ歟）ナ

【整定本文】

山家ノヨブコドリヲ　桜井大僧正
カリニキテマダスミツカヌ山里ニナレ〳〵シクモヨブコドリカナ

【現代語訳】

山家の喚子鳥という題を　桜井大僧正
仮初めにやって来て、まだ住み慣れてはいないこの山里で、（早くも）たいそう親しげに（私を）呼ぶ喚子鳥ですよ。

【作者】行慶。園城寺僧。白河院皇子。母は源政長女。康和三年（一一〇一）～永万元年（一一六五）。六五歳。行尊の弟子となり、覚猷から伝法灌頂を受ける。四天王寺別当、園城寺長吏等を勤め、近衛・後白河・二条の三天皇の護持僧となった。特に後白河院からは篤い尊崇を受け、伝法の師となった（今鏡・腹々の御子、愚管抄、園城寺伝記）。桜井大僧正・狛僧正と号す。『千載集』『新古今集』に各一首、『玉葉集』に二首入集する。また、『続詞花集』に四首、『月詣集』に一首入る。『寂蓮集』に「桜井僧正かくれ給ひて後年久しくなりて、彼すみ給ひける山里をまかりて見ければ、いと物さびしくあれはてて、庭も籬も秋ののらと成りて侍りければ」の詞書で「うゑおきし籬の花も秋ののとなりはてねとは思はざりけむ」の歌が見え（八六）、また、『頼輔集』には、「狛前大僧正天王寺のべたうの時、

つのくににてしほゆあみ侍りしをり、よろづかのとぶらひにて候ひしを、かくれたまひてのち、なにはのかたにしほゆあみ侍るに、むかしおもひいでられて法印行乗のもとへ申しつかはせる」の詞書で、法印行乗（行慶から伝法灌頂を受けた園城寺僧）との贈答が載り（一一九・一二〇）、寂蓮や頼輔との交友が知られる。

【語釈】○山家ノヨブコドリ　「喚子鳥」は「春日有（カスガナル）　羽買之山従（ハガヒノヤマユ）　狭帆之内敝（サホノウチヘ）　鳴往成者（ナキユクナルハ）　孰喚子鳥（タレヨブコドリ）」（万葉集・巻十・一八二七）等、『万葉集』から詠まれる歌材だが、具体的に何の鳥を指すのかについては諸説あって明確ではなく、後世の古今伝授においては三鳥の一つとして秘説の対象となった。『古今集』以降は春の鳥として詠まれた。「をちこちのたつきもしらぬ山なかにおぼつかなくもよぶこどりかな」（古今集・春上・二九・読人不知）、「いとかやまくる人もなきゆふぐれにこころぼそくもよぶこどりかな」（金葉集・春・二六・前斎院尾張）のように、「呼ぶ」を掛けて用いることが多い。『堀河百首』で春部歌題として設題され、「答へする人なき山のよぶこ鳥ひとりなきてや春をすぐらん」（二一四・仲実）、「おぼつかなたれよぶこ鳥なくならんこたふる人もなき山中に」（二一九・基俊）のような作が詠まれた。以上の作例から、訪れる人も稀な寂しい山中で人懐かしげに、あるいは人を誘うように鳴く鳥として扱う詠み方があったと知られる。「山家喚子鳥」の題はこの詠み方を反映するか。「山家」は山里の住まい。→226番歌【語釈】。「山家喚子鳥」題の作は、当歌の他は、「山ざとへたれをまたこはよぶこどりひとりのみこそすまんとおもふに」（山家集・四九）が残るのみである。**○カリニキテ**　ついちょっとという仮初めな気分でやって来て。「梅がえをかりにきてをる人やあるとのべの霞はたちかくすかも」（拾遺集・雑春・一〇一四・順）のように、三代集から見える措辞。「山しろのよどのわかごもかりにきて袖ぬれぬとはかこたざらなん」（新古今集・恋三・一二八・重之）や、「きぎすなくとぶひののべをかりにきてそらとるたかにまかせつるかな」（元永元年十月内大臣家歌合・三六・定国）のように、「仮」に「刈り」や「狩り」を掛けて用いる例があるが、平安末期には、「かりにきてみるだにたへぬ山里にたれつれづれとあけくらすらん」（長明集・八七）、「かりにきてたれたのめけむくれごとにかたののをのにまつむしぞなく」（経盛集・六〇）のように、掛詞を用いない作例が見える。**○マダスミツカヌ**　生活する場としてまだ根をおろしてはいない。長く定住するつもりもなく一時的にやって来ただけで、まだ土地に落ち着いてはいないことを示す。**○ナレ〳〵シクモ**　いかにも馴れ親しんでいる様子で。他に用例はない。

【補説】歌題に即して読解するならば、一時的に身を置こうと山里を訪れた作中主体が、住み慣れない物寂しく孤独な環境の中で、喚子鳥の声を親しみ深く感じている状況を描いた作と解せる。しかし、「仮」「住みつく」「馴れ馴れしく」「呼ぶ」等、恋愛に関連する語を多く用いた点に注目するならば、作中主体と喚子鳥とを恋人関係に見立てた読み方が可能となる。すなわち、実意のないまま軽々しく女性の許に赴いたものの、相手を定まった異性とする安定した男女関係を保つまでには至らない男性と、にも拘わらず男性に対して親しみ深い態度を示す女性の物語が浮かび上がる。歌題が要請するところに従って、孤独な山中に喚子鳥が人懐かしさをかき立てるかのように鳴く情景を描きつつ、語同士の連関を通して恋愛の一様相を示して、一首の背景に艶な気分を揺曳させる意図があったかと推測される。

なお、「まだすみつかぬ」は他に用例が見出せない表現で、「住み着く」を詠んだ作も稀少である。その用例の一首、「ながらへてありはつまじき世中になにとすみつくわがみなるらん」（今撰集・

一七七・左大臣家卿）は、詞書に「袖にすみのつきたるを、人のたれかこふるならひなどとぶらひければ、いひける」と見え、四句の「住み着く」には「墨付く」が掛けられている。「墨付く」とは、『奥義抄』中巻に「人に恋らるゝ人は袖に墨つく」（本文は大東急記念文庫蔵『奥義抄』による）と記されるごとく、誰かに恋慕されると袖に墨がつくという俗信である。251番歌において、二句「マダスミツカヌ」が、「まだ自分の住まいとして根を下ろしてはいない」という表の意に、「まだ私の袖には墨もついていない」すなわち、「私はまだ誰かに恋慕されてはいない」意が重ねられているとすれば、下句もやや諧謔性を帯びた内容として解され、喚子鳥と来たら早くも私に対して恋人気取りで馴れ馴れしく呼びかけていることだ、と非難がましく表現してみせた作となる。（中村）

閑中春雨ヲ　　源仲綱

251　アリフレハカキネノシトヽソホヌレテ
　　サエツリクラスハルノ山里

【整定本文】　閑中春雨ヲ　　源仲綱
アリフレバカキネノシトヽソホヌレテサヘヅリクラスハルノ山里

【現代語訳】　閑中春雨を　　源仲綱
この世に長らえていると、垣根に止まる鶏が（春雨で）ぐっしょりと濡れそぼって（そんな状態で）一日中囀り続けている、それと同じように、私も（涙で）ぐっしょりと濡れながらとめどなく愚痴を言い暮らしている、ここ春の山里であるよ。

【他出】『夫木抄』一二八七一
　常盤先百首、閑中春雨　　源仲正
あめふればかきねのしととそほぬれてさへづりくらすはるの山ざと

【詠出機会】『為忠家初度百首』七〇「閑中春雨」源仲正
あめふればかきねのしとどそほぬれてさへづりくらすはるの山ざと

【作者】源仲綱。清和源氏（摂津源氏）頼政男。251番歌の実際の作者仲正の孫に当たる。母は源忠清女か。兄弟に兼綱・二条院讃岐がいる。大治元年（一一二六）～治承四年（一一八〇）年五月二六日。五五歳。右兵衛尉・東宮（後の二条天皇）蔵人を経て、六位蔵人（後白河天皇）となり、保元三年（一一五八）叙爵。伊豆守・隠岐守を歴任し、正五位下に至る。住吉社・広田社・別雷社の歌合や建春門院北面歌合に出詠、俊成家十首会の作者に入る。兼実家の歌合にたびたび加わり、『右大臣家百首』の詠者となった。治承四年、父頼政とともに平家討伐の兵を挙げ、平等院で自害したとされる。『千載集』以下の勅撰集に一一首入集、『治承三十六人歌合』の人数に入り、『続詞花集』『月詣集』等の同時代私撰集にも採られる。『言葉集』には三首入る。《参考文献》井上宗雄『平安後期歌人伝の研究　増補版』第四章四（笠間書院、一九八八年）

【語釈】○閑中春雨　「閑中」を含む歌題は、「閑中郭公」（散木奇歌集・二七〇「なきつとも誰にかいはん郭公かげより外に人しなければ」）、「閑中月」（初奏本金葉集・冬・四〇六・公実「かれはてて人もおとせぬやまざとに我をわすれぬ冬の夜の月」）や、長治五年（一一〇四）の源広綱家歌合で設題された「鶯閑中友」（「うぐひすのこゑを友にてくらすかなひとりながむる春の山里」国基）が早く、平安時代後期以降に用例が増加する。ただし、総じて多くは見えず、当歌が詠まれた『為忠家初度百首』「閑中春雨」題、および『為忠家後度百首』の「閑中郭公」題は早い例である。「閑中歳暮」（千載集・冬・四七五・親範）、「閑中雪」（長秋詠藻・二六八）、「閑中時雨」（山家集・五〇二）等の歌題がある。「閑中春雨」題歌には、「つくづくと春のながめのさびしきはしのぶにつたふ檐の玉水」（新古今

集・春下・六四・行慶）、「つれづれとふる春雨の日かずへてやむ世もしらぬものおもふかな」（小侍従集・一三）がある。「閑中」の題意は、右掲のごとく、訪問する者もない孤独な境涯や、隠遁的な山居を通して表現されることが多い。また、するべきこともなく、つくねんと物思いに沈みながら過ごす様を詠む例もある。**○源仲綱**　本来の作者は仲綱の祖父に当たる仲正。仲正は頼綱男。母は小一条院女房で、後に藤原師実室麗子の女房中納言局となった。生没年未詳。治暦年間（一〇六五～六八）頃～保延三（一一三七）、四年。六位蔵人・左衛門尉・検非違使等を勤めて、承徳元年（一〇九七）叙爵。皇后宮大進・兵庫頭等を歴任した。長治元年（一一〇四）俊忠家歌合、元永元年（一一一八）実行家歌合、大治三年（一一二八）西宮歌合・住吉社歌合、長承三年（一一三四）顕輔家歌合等に出詠し、長承三年～保延元年（一一三五）頃に催された為忠家両度百首の作者となるなど、歌人として活躍した。また、「法輪百首」「山家百首」を詠んだ（夫木抄）。『金葉集』以下の勅撰集に一五首入集する。家集に『蓬屋集』があったらしいが（古蹟歌書目録）散佚、現存する家集『仲正集』は後人の編。《参考文献》井上宗雄『平安後期歌人伝の研究　増補版』第四章二（前掲）、加畠吉春「源仲正の和歌」（『平安朝文学研究』七、一九九八年一一月）、家永香織『転換期の和歌表現　院政期和歌文学の研究』（青簡舎、二〇一二年）。**○アリフレバ**　この世に生き長らえていると。比較的稀少な措辞で、勅撰集の例はない。「をしとおもふをりやありけむありふればいとかくばかりうかりける身を」（和泉式部集・二九三）、「あり経ればうれしき瀬にも逢ひけるを身をうぢ川に投げてましかば」（源氏物語・早蕨・六九五・大輔の君）等が用例として早いが、平安末期の歌人に集中的に見出せ、重家・実定・隆信・公重・頼輔等に作例がある。「ありふれば憂世のなかのすみうきに我もゆかばやみよしの山」（定頼集・五八）、「ありふればすさまじくさへなりぞゆくかしらのゆきのつもりつもりに」（風情集・五七七）のように、「生き続けていると望ましくない状況や事態が生起する」という文脈で用いられることが多い。**○カキネノシトヽ**　「鵐（しとど）」はホオジロ類の小鳥、ホオアカ等の総称。『古事記』の歌謡等、早くから見られるが、和歌の用例は少なく、『金葉集』所収の「あめふればきじもしとどになりにけり／かささぎならばかからましやは」（雑下・六六一・読人不知）の連歌が早い。250番歌は『金葉集』所収の連歌と同様に、鳥の名「鵐」に、ぐっしょり濡れる意の副詞「しとど」を掛ける。「山ざとはかきねのしとと人なれて雪降りにけり谷のほそ道」（壬二集・九六八）、「人とはぬ冬の山路のさびしさよ垣ねのそばにしととおりゐて」（拾遺愚草・七五九）のように、「垣根」と取り合わされる例がほとんどであるのは、251番歌の影響か。**○ソホヌレテ**　「鵐」がすっかり濡れそぼつ意に、作中主体が泣き濡れる意を掛ける。当歌以前の作例としては、「思へただたもとは露にそほぬれてたちやすらひし夜半のけしきを」（散木奇歌集・一〇六七）等、俊頼の二例（散木奇歌集・一〇八七）のみ。また、『為忠家後度百首』「騎射」題に「さみだれにくまのむかばきそほぬれてあけゆくいてやことりなるらん」（七一九・為忠）が残る。**○サヘヅリクラス**　鳥が一日中鳴き続けている意に、作中主体がとめどなく理解しにくいことを話し続ける意を掛ける。この措辞の用例は他に、「ももちどりさへづりくらす春の日をものうかるねにうちながめつつ」（明日香井集・三〇〇）が残るのみ。「囀る」の語は、「ももちどりさへづる春は物ごとにあらたまれども我ぞふり行く」（古今集・春上・二八・読人不知）のごとく『古今集』から用例が見え、これの影響下に詠まれた前掲雅経詠や、「ももちどりさへづる春はうらうらとなれども我が身くもりつつのみ」（永久百首・「春日」仲実）」のように、鳥の

囀りは憂愁の気分と取り合わされることがある。**○ハルノ山里**　作中主体の住まいを人の訪れの稀な「山里」に設定することで、歌題の「閑中」の題意が満たされる。

【補説】初句「ありふれば」は、『為忠家初度百首』や『夫木抄』所載歌では「あめふれば」となっている。歌題が「閑中春雨」であり、また、作中の「鴉」が「そほ濡れて」いることとの照応からは、「雨降れば」とするのが適切であろうかと思われる。ただし、「ありふれば」の措辞は、用例が多くはないものの、平安末期の歌人に集中して作例を見出せるので、校訂をせずに解釈を試みた。初句「アリフレバ」は人物に関する表現と考えられるので、三・四句に続いて作中主体の境遇と感懐を示す文脈を形成すると解した。一方で、二句「カキネノシトヽ」は三・四句と結びついて山里の実景を叙す文脈を形成し、山家に隠遁する作中主体の状況と、その中でのふるまいとを二重の文脈で語ろうとしている。初句を「雨降れば」とする『為忠家初度百首』仲正歌の形であれば、訪ねて来る人もなく、しとしとと降る春雨に降り籠められ、日がな囀る鳥の声に耳を傾ける以外にない山居の蕭条とした情景を、「しとど」の掛詞を趣向として点じて描き出した、「閑中春雨」の題意に沿う作と解釈できる。250・251番歌では、山中に隠遁した作中人物の心細さや鬱屈等の心情を比較的珍しい鳥に託して表現した作が続く。（中村）

臨時祭ノ哥人ニタヒコトニ
セメラレケレハ
清輔朝臣

252　ワレヒトリトシヲカサネテカサスカナ
イクヘニナリヌ　山フキノハナ

【整定本文】
臨時祭ノ哥人ニ、タビゴトニセメラレケレバ　清輔朝臣
ワレヒトリトシヲカサネテカザスカナイクヘニナリヌ山ブキノハナ

【本文に関する注】四句と五句の間に一字分ほどの空白アリ

【現代語訳】
臨時祭の陪従（を勤めるよう）にと、（臨時祭の）たびごとにしつこく求められたので　清輔朝臣
私ひとりが、齢を重ね年老いているのに、何年も繰り返して（臨時祭の挿頭を）頭に挿すことですよ。いったい幾重ねになったことでしょう、（陪従の挿頭である）山吹の花は。

【他出】『清輔集』四一一
臨時祭の歌人にたびごとにせめられければ
われひとり年をかさねてかざすかないく重に成りぬ山吹の花
歌のしるしにやゆりにけり

【作者】藤原清輔→326【作者】

【語釈】**○臨時祭**　臨時祭には、三月中午日に行われる石清水臨時祭と、十一月下酉日に行われる賀茂臨時祭があるが、ここでは賀茂臨時祭か。為忠家後度百首や文治六年女御入内屏風和歌などでも、「臨時祭」の題で賀茂臨時祭が詠まれる。【補説】参照。ただし、『言葉集』雑上部の配列では晩春の歌材を詠む作の中に置かれており、賀茂臨時祭の歌としてではなく、あくまでも「山吹」をテーマとした作として扱われている。**○哥人**　臨時祭に奉仕する陪従。舞人に従い、楽器を演奏したり、歌を唱うので歌人（うたびと）とも呼ばれた。臨時祭について録す古記録では、陪従を「歌人」と記す場合がある（兵範記・仁安二年三月二〇日条、同・仁安三年一二月一六日条等）。**○セメラレケレバ**　厳しく催促されたので。**○ワレヒトリ**　「水のおもに月の沈むを見ざりせば我ひとりとや思ひはてまし」

（拾遺集・雑上・四四二・文時）、「我ひとりうきよのなげくことわりをなみだならではしる人もなし」（成尋阿闍梨母集・一五三）のように、自分だけが不当に辛い思いを味わっているという不遇感の表出に用いられることがある。清輔にはこの措辞を用いた作が、252歌の他、「われひとりいそぐたびとぞおもひつる夜をこめてのみ立つかすみかな」（清輔集・三二九）、「われひとりからなづなこそかなしけれみをつみてだにとふ人もなし」（清輔集・三八〇、述懐百首）の二首残る。**〇トシヲカサネテ**　「何年も繰り返して」の意と、「齢を重ねて老いて」の意を掛ける。【補説】に示すごとく、252番歌が嘉応二年以降の詠とすれば、清輔は六十三歳以上となる。**〇カザス**　臨時祭に奉仕する者として挿頭花を冠に挿す。**〇イクヘニナリヌ**　山吹には八重咲きの品種（八重山吹）があるゆえか、歌に詠む際に、「あかずのみ思ふ心のかさなればいくへともなし山ぶきのはな」（散木奇歌集・一七五）のごとく、「幾重」「重ね（重ぬ）」を連関する語として用いる例がある。252番歌においても意識的に取り合わされたと考えられる。この措辞により、「いったい幾度かさねて山吹の花を挿頭としたことだろうか」の意味内容が示されるとともに、山吹の花が幾重にも重なる映像が喚起される。「山吹」と「幾重」との語同士の連関をさらに密接なものと解するならば、「何度も陪従を務めたので、挿頭にした山吹はどれほどたくさん積み重なっているだろうか」と、自らの境遇を諧謔的に捉えた表現となる。**〇山ブキノハナ**　臨時祭では、使が藤、舞人が桜、陪従が山吹の挿頭花を付ける。臨時祭の陪従が山吹を挿頭花とすることを詠んだ作として、石清水臨時祭の例ながら、「こころには雲井のふぢをかけながらさのみやささむ山吹の花」（隆信集・七六九「又の春、臨時祭のかべいじゆうに、たかふさの卿の、蔵人頭にてもよほされしに、返事のはしにかきそへ侍りし」）がある。

【補説】『兵範記』によれば、清輔は仁安二年（一一六七）一一月二一日と嘉応元年（一一六九）一一月二一日に賀茂臨時祭の陪従を勤めている。『清輔集』四二五に「新院御位におはしましける時、臨時祭の四位の陪従にめされて侍りけるに、弘徽殿のほそ殿に立ちよりて、先帝中宮女房をたづねいだして火あふぎのつまををりて、書付けてとらせける」の詞書で収める「むかし見し雲のかけ橋かはらねど我が身ひとつのとだえなりけり」の歌（風雅集・雑二・一八五一に入る。詞書に「六条院位におはしましける時」）は仁安二年度に勤仕した際の詠と考えられる。また、『清輔集』四三八に「臨時祭に四位陪従といふことにめしいだされて、かもにまゐりてよみて、人のもとへつかはしける」の詞書で収める、「こもりぬにしづむかはづは山吹の花のをりにぞねはなかれける」の歌は、『経正集』九四に「賀茂臨時祭の舞人して侍りしに、清輔朝臣陪従にてよみ侍りし」の詞書で収められており（初句「かくれぬに」）、清輔が歌を送った相手が平経正であったと知られるが、『兵範記』嘉応元年一一月二一日条には経正が賀茂臨時祭の舞人を勤めたことが記されており、この贈答は嘉応元年度に交わされたと知られる（井上宗雄『平安後期歌人伝の研究　増補版』第二章四「藤原清輔年譜考」笠間書院、一九八八年に指摘がある）。252番歌詞書に「臨時祭ノ哥人ニ、タビゴトニセメラレケレバ」と記すのは、この仁安二年と嘉応元年の賀茂臨時祭に、重ねて陪従として奉仕したことを指しているのではないだろうか。この推測が肯定されるならば、252番歌は嘉応二年（一一七〇）以降の詠となる。

なお、252番歌は詞書が『清輔集』とまったく同一であり、『言葉集』は『清輔集』から採歌したと推定されるが、『清輔集』の当該歌に付されていた、「歌のしるしにやゆりにけり」の左注は、『言葉集』では除かれている。『清輔集』では自歌の歌徳を語るのに対し、左

注を欠く『言葉集』では、使や舞人ではなく陪従を何度も勤めなくてはならない身の不遇と嘆老とを、やや自虐的に突き放した歌として解せる。（中村）

花中愛藤ト云題　雅隆朝臣

253　モ□□□□（ロ人ノカ歟）サシノハナハアマタアレト　ナヲ□（モ歟）コヽロニカヽルフチカナ

【整定本文】　花中愛藤ト云題　雅隆朝臣

モロ人ノカザシノハナハアマタアレドナホモコヽロニカヽルフヂカナ

【現代語訳】　「花中愛藤」という題を　雅隆朝臣

人々が挿頭として着ける花はいろいろとあるけれど、やはり、心から離れないのは藤の花だよ（藤の花を挿頭とするような立場に就きたいものだ）。

【作者】藤原雅隆。良門流光隆男とすれば、久安三年（一一四七）生。『尊卑分脈』記載の享年「七十八歳」が正しければ、元仁元年（一二二四）没。母は藤原信通女。異母弟に家隆がいる。越後守・内蔵頭等を経て、文治元年（一一八五）叙従三位。建久九年（一一九八）、正三位に昇叙。建仁元年（一二〇一）正月、皇后宮権大夫に任ぜられ、建永元年（一二〇六）九月まで勤めた。建保元年（一二一三）九月五日出家。『月詣集』に「藤原雅隆朝臣」の名で入る「野径草花」題歌「さらぬだに過ぎもやられぬ秋ののにたはれもかかる女郎花かな」（六四九）は、所収歌集の成立時期が近接していることから、253番歌作者と同一人の詠と推定される。この「雅隆」と、正治二年石清水若宮歌合に出詠して四勝一持の成績を得た「正三位藤原朝臣雅隆卿」、すなわち光隆男雅隆や、『雲葉集』に「月前菊」題歌（六五六）が入る「正三位雅隆」も同一人と考えられる。《参考文献》久保田淳『新古今歌人の研究』第三篇第一章第二節「壬生の家門」（東京大学出版会、一九七三年）

【語釈】○花中愛藤　他に見えない歌題。『和漢朗詠集』「菊」に収載される元稹の句「不是花中偏愛菊（これはなのなかにひとへにきくをあいするにはあらず）」（二六七）に拠る歌題か。藤は「恋之家婆　形見尓将為跡（コヒシケバ　カタミニセムト）　吾屋戸尓　殖之藤浪（ワガヤドニ　ウエシフヂナミ）　今開尓家里（イマサキニケリ）」（万葉集・巻八・一四七一・山部赤人）のように、『万葉集』以来愛された植物であった。**○モロ人**　本来は「多くの人、衆人」の意だが、ここでは、「庭もせにひきつらなれるもろ人のたちゐるけふやちよのはつ春」（散木奇歌集・一）の用い方と同じく「廷臣」の意か。臨時祭の挿頭とともに用いた作に、「かみがきのはなのさかりにうちむれてをらぬさくらをかざすもろ人」（経正集・九）がある。**○ナホモコヽロニカヽル**　気になって仕方がないという気持を「なほも」で強調する。「花中愛」の題意を満たす。**○フヂ**　「かかる」と「藤」の縁語により、心にまとわりついて離れないイメージを作り出し、強い執着を表現する。「藤」と「心にかかる」を組み合わせた作に、「ふぢのはな見ぬよそ人のこころにもきくにつけてぞなほかかりける」（六条修理大夫集・一三六）がある。

【補説】前歌と「挿頭花」を共通のモチーフとして連関し合う。253番歌は臨時祭に関する歌題を詠んだ作ではないが、この配列により、読者は「臨時祭」（歌集内部の位置からは石清水臨時祭）を念頭に置いた解釈に導かれる。252番【語釈】「山ブキノハナ」項で示した通り、臨時祭において藤は使の挿頭として用いられた。臨時祭で舞人や陪従ではなく使を勤めることへの憧れを「藤」の花によって表現した歌に、『隆信集』八二番の、「としごろ、まひ人、かべいじゆうなどつとめしことを思ひて、そのつぎの日、かの社の神主しげやすがもとへ申しおくりし」の詞書で収められる、「君みずやさくらやまぶきかざしきて神のめぐみにかかる藤なみ」がある。252番歌

との関連からは、253番歌の「藤」を臨時祭で使を勤めたいとする希望の表徴と解すことも可能である。しかしながら、挿頭として藤を用いるのは臨時祭だけではない。列見や大嘗祭においても大臣は藤を挿頭とするので、そうした儀式において藤を挿頭とするような公的位置に昇進したいという希望を述べたとも考えられる。一方、藤は「藤原氏」を象徴する植物でもあるので、藤原氏の一員として他の植物ではなく藤にこそ愛着を感じる気持を詠んだ可能性も考えられる。（中村）

A Commentary on "*Genyo shu*" (7)

Kenta KOBAYASHI, Jun ANAI*, Aya NAKAMURA** and Rei MOCHIDA***

Accepted June 19, 2024

抄録：『言葉集』は平安時代末期に惟宗広言が編纂した私撰集である。本稿は冷泉家時雨亭文庫蔵本を底本として、『言葉集』雑部上 245 ～ 253 番に注釈を施した。当該範囲の歌の作者は静蓮、顕昭、小侍従、周防内侍、西行、行慶、源仲綱、藤原清輔、藤原雅隆である。その中には、宮中の調度品や神社の祭事などに関係する歌もある。和歌の語釈や現代語訳に加え、当時の文化的環境も踏まえて注釈を試みた。

索引語：言葉集、惟宗広言、私撰集、平安時代末期、雑部上

Abstract: *Genyo Shu* is a Shisenshu (personal collection of poetry) compiled by Koremune Hirotoki in the late Heian era. This paper is based on "The Reizei Shigure-tei Series" and annotates the waka poems numbered 245–253 in the *Genyo Shu*. This section includes waka poems by various poets, focusing on themes related to court furnishings and shrine festivals. We have provided detailed explanations of the words and modern translations of the waka poems. Additionally, we have considered the cultural environment of the time in our annotations.

Key Words: *Genyo shu*, Koremune Hirotoki, shisenshu (personal collection of poetry), late Heian era, first half part of miscellaneous subjects

* 奈良大学文学部

** 元埼玉学園大学人間学部

*** 文学通信編集部